ちば再発見【船橋市】

「ふなばし街歩きネットワーク」と歩く

港町と家康ゆかりの景色

主催：千葉県健康管理士会
千葉県東葛健康管理士会

協力：
ふなばし街歩きネットワーク

家康の一夜道 御成街道を歩く

今回の旅は、明治初期の建物が残る森田呉服店の前からスタートした。「目の前の本町通りが、『徳川家康の一夜道』とも言われる御成街道です」と語るのは、ふなばし街歩きネットワークの代表理事、さとうももよさん。御成街道は、家康が鷹狩りのために作らせた、船橋と東金を一直線に結ぶ道路で、船橋宿が栄える端緒となった。一本裏の御殿通りへ、さらに脇道へと進むと、家康を祀る「日本一小さい東照宮」が、住宅街にひっそりと建つ。一帯は、家康が鷹狩りの際に泊まった船橋御殿の跡だ。副代表理事で学芸員の資格も持つ仲村章さんは「元和元（1615）年、家康が当地に泊まった記録があります」と説明する。当時は広大な御殿で、軍事拠点でもあったそうだ。少し歩いて海老川橋。船橋の地名の由来は、日本武尊（やまとたけるのみこと）が東征の折、川に舟を並べて橋にしたことといわれ、舳先をかたどった欄干がある。

御殿跡地に建つ、日本一小さい東照宮

さらに進んで、船橋大神宮（意富比（おおひ）神社）の石段下に出る。同社は、社伝によれば景行天皇40年（4世紀頃か）、日本武尊が神鏡を祀ったのが創始という。同会の湯浅佽彦（としひこ）さんは、由緒とともに「たくさんある境内社の違いを見るのもおもしろいですよ」と教えてくれた。摂社の常磐神社は、日本武尊のほか徳川家康、秀忠を祀る神社で、「江戸時代には、日光や久能山の東照宮と同格でした」とは、同会の鈴木久美子さんの説明。2015（平成27）年に建て替えられた社殿は、江戸時代の豊かな色彩を再現して見事だ。傍らには、明治時代に使われた灯明台（灯台）が残る。同会の佐藤佐知子さんが「戊辰戦争で焼失し、明治になって再建されたもので、和洋折衷の建築様式が特徴です」と教えてくれた。

木造瓦葺きの灯明台は、1、2階は和風、3階は西洋となっている

御菜浦では、広大な漁場を占有することを許されていた

ガイドは得意を生かし皆で楽しみながら

ふなばし街歩きネットワークは、船橋市観光協会の「街歩きプロジェクト」を契機に、2009（平成21）年に会員40名で発足した。「だから正式には『一般社団法人船橋市観光協会認証』という長～い前置きが付くんですよ」と、さとうさんは笑う。以来、市内観光の一翼を担い、現在の会員は51名。11チーム23コースを中心に、保険料込み500円の有償ボランティアで街歩きのガイドを務めている。「誰か一人の『カリスマガイド』に頼らないよう心がけています」という、さとうさん。その言葉どおり、この日もスポットごとに交代で得意なメンバーが担当し、それぞれに個性ある説明が聞けて楽しかった。広報委員長の平田隆志さんは「皆で楽しみながらやるのが、長続きの秘訣です」と語る。ガイド対象は5名以上、例年1200名ほどを案内してきたといい、コロナ収束後の復調に期待がかかる。

大神宮からさらに歩く。国道14号線を超えると係留船が見え始め、高架の京葉道路をくぐって海老川水門に至る。上部は地元の人たちの抜け道にもなっていて、この水門と両岸の排水機場が市街地を水害から守っている。仲村さんは「家康がここに泊まったとき、漁師が献上した魚をたいそう気に入って、船橋は江戸城に魚を献上する御菜浦（おさいのうら）になりました」と語り、当時の献上品リストを見せてくれた。今も、水門の内外に漁船や漁具が所狭しと並び、駅からこんな近い場所に「港町」があることに驚かされる。再び京葉道路をくぐり、少し歩くと不動院。同会の西野雅也さんは「ここで行われる大仏追善供養は、石造りの釈迦如来坐像にご飯を塗りつけるのが特徴です」と説明してくれた。家康ゆかりの地に加え、港町の風情も楽しめる船橋の街。身近に広がるバラエティー豊かな景色を、一度訪ねてみてはいかがだろうか。

前列左から、さとうさん、佐藤さん、鈴木さん。後列左から西野さん、湯浅さん、仲村さん、平田さん